

海後磋磯之介、明治に死す（上）

明治36年（1903）5月17日早朝、水戸市天王町で一人の「幕末の志士」が息を引き取りました（享年76）。彼の名は海後宗親（通称は磋磯之介）。

安政7年（1860）3月3日、時の幕府大老・井伊直弼を襲撃（桜田門外の変）した水戸脱藩士ら18人のうちの一人にして、事件後も生きのびた2人のうちの一人です。

この磋磯之介の数奇な生涯に注目したのが、文豪吉川英治でした。小説『旗岡巡査』（『週刊朝日』昭和12年〈1937〉初夏特別号）は、桜田事件後、下総松戸の醤油船に匿われ、船主権十とその娘お松の機転に助けられた磋磯之介が、烏山近くの実兄高野糸之介宅（現常陸大宮市小田野）とその裏山に潜伏するが、そこで恋仲のお那珂との別れを経験する、明治9年（1876）、「旗岡剛蔵」と名を変え、茨城県の結城警察署に勤務する磋磯之介は、派遣先の横浜・異人屋敷で殺人事件に遭遇する、男を殺した元花魁は何と約16年ぶりに邂逅した「お松」、そしてお松が殺した男の妻は、かつて恋い焦がれた「お那珂」だった…、といった内容ですが、早くも3年後の昭和15年（1940）には映画化されています。



▲海後磋磯之介潜居趾（小田野地区）



石井 裕 氏
近現代史部会専門調査員
茨城県立歴史館主任研究員

映画『旗岡巡査』（牛原虚彦監督、依田義賢脚本）は、松戸の船主権十が磋磯之介を密告しようとし、また磋磯之介を助けようとした「お松」が旧彦根藩士渡辺幾三郎の妾となって現れ、「先君の仇」と磋磯之介に斬ってかかる渡辺をピストルで撃ち殺した、などと随所に脚色がなされ、この映画は「本年度のベスト・スリーとなろう」（『キネマ旬報』709号、1940年3月）と、高い評価を得ました。映画の反響もあったのか、翌年、磋磯之介の潜伏先である高野家に、記念碑「海後磋磯之介潜居趾」が建立されています。

旧彦根藩士の復讐をおそれ、明治を変名で生きた、というあたりは、まるで映画『柘榴坂の仇討』（若松節朗監督、2014年公開、浅田次郎原作）を思わせるような展開ですね。では、明治を生きた磋磯之介の実際の姿は、どのようなものだったのでしょうか？

（次号につづく）



▲旗岡巡査（広告）

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）